

## 保健医療技術学部 学部基幹科目（2020年度以降第1学年次入学者適用）

区分	科目名	履修開始semester	1	2	3	4	5	6	7	科目概要
			建学の理念に基づいて、共生と平等、人間尊重、平和への希求を体現し、人類の進歩に貢献する力を有している	医療人として常に人の側にたって、人とともに人生の苦しみとたたかう強い意志や意欲を有している	医学・医療・保健の世界で活躍するために必要な学力を有し、常に実践の質を高める努力を続ける力を有している	医療・保健の現場で必要とされる読み書き能力や良好なコミュニケーション能力を有している	研究の面白さや研究的思考方法の基礎を修得することによって、将来、臨床とともに研究も行いうる資質をもっている	互いの専門性の理解のうえにたつた対等な立場でのチーム医療や連携実践のあり方を追求する能力を有している	今後のさらなる医学・医療・保健の高度化・国際化・情報化に対応して活躍する力をもっている	
学部基幹	医療概論	1	○	◎					◎	保健・医療・福祉の統合が求められる社会状況の中、医療チームの成員が互いに協力して、総合的サービスを提供することが重要である。一つの問題に対して、多職種がそれぞれの専門的立場からアプローチし、意見を交換することによって全人的治療は実現する。良好な医療チームの形成は、他の専門職種を理解することから始まる。医療に関わるスタッフのそれぞれの学問体系、役割、機能、権限などを知り、相互理解を深め、症例を通して連携の方法論とチームダイナミクスについて考察する。模擬患者を利用し、カンファレンス、記録のあり方、チームによる全人的アプローチなどについて学ぶ。

## 理学療法学科 専門科目（2020年度以降第1学年次入学者適用）

区分	科目名	履修開始セメスター	1	2	3	4	科目概要
			理学療法に関する最新の知識と技術を理解する能力を有している	理学療法に関する体験や実践を通して得た情報を整理し応用する能力を有している	理学療法に関する専門的知識と技術を習熟する能力を有している	理学療法士として必要な治療技術および企画力、円滑な対人交流を行う能力を有している	
学科基礎	入門ゼミ	2	○			◎	理学療法士の学習にあたり、現代医学とリハビリテーション、リハビリテーション医療と理学療法を中心に、これに関係する医学と理学療法学関連、医療史、保険制度、職域、法律（医師法および保健師法と理学療法士および作業療法士）、リハビリテーションチームなどについて教授する。
	リハビリテーション医学概論	1	◎				リハビリテーション医学は、人間の行動や行為の障害に対する治療を基本とする臨床医学の一分野であり、既存の専門性にとらわれない総合性、自立生活への指向と個人の決定の重視、「なにができるのか」に着目する肯定的な見方などを特徴とする。授業では、リハビリテーションの基礎知識、診断・評価、治療法、社会連携（地域包括ケアシステムや就労支援）、具体的疾患に対するリハビリテーションについて概説する。リハビリテーションの本質、および技術としての評価法・介入方法の概略、運動とエネルギー代謝の基礎、神経機能障害、がん、骨・関節疾患に対するリハビリテーションの概略、などの理解を目的とする。
	公衆衛生学	2	◎				公衆衛生学とは「組織化した地域活動を通じて、疾病の予防、生命の延長、および肉体的精神的健康の確保と増進を図る科学・技術である」であり、疾病対策や保健・福祉対策の現状と仕組み、疫学研究手法、主要疾病の疫学と予防などについて学習するとともに、公衆衛生の領域の社会的諸問題についても教授する。
	基礎解剖学	1	◎		○		解剖学は、生物体の正常な形態と構造とを研究する学問であり、医学の領域では人体解剖学を指す。この人体解剖学では、人間の身体づくりや形について学ぶが、その基礎は構造を明らかにすることであり、人体の構造全般について教授する。
	解剖学	2	○		◎		基礎解剖学を踏まえ、人間の生命活動、生活行動に必要な人体の構造と機能について統合的な理解をはかるため、人体各部の大きさ、構造及び諸臓器の位置関係に関して講義する。特に、骨格系、筋系、神経系については重点をおいて教授する。
	解剖学実習	3	○	◎			解剖学実習は、基礎解剖学、解剖学で学習した知識を、標本もしくは人体で確認し、立体的・構造的に理解することが目的であるが、理学療法士・作業療法士にとって特に重要な骨格系、筋系、神経系においては重点をおいて行う。
	基礎生理学	1	◎		○		生理学は生体の機能を研究する学問である。生命活動を支える生体機能は、極めて巧緻な仕組みとその働きを厳密にコントロールする制御機構によって成り立っている。本講義では、この生体機能を理解するうえで基盤的知識体系となる神経系、筋系、内臓系の働きとその制御機構についての基礎的内容を教授する。
	生理学	2	○		◎		基礎生理学を踏まえて、生命活動を支える人体の各機能系のしなやかな働きとその優れた制御機構について教授する。とりわけ理学療法および作業療法などの医療に関わる者に必要とされる、循環、呼吸、内分泌、生殖、消化・吸収、腎、感覚、運動、自律神経機能など、生活行為に深く関わる生理学について教授する。
	生理学実習	3	○	◎			生理学実習では基礎生理学および生理学で学んだ知識を実習によって体験し、人体の多様な機能と調節機構について理解を深める。さらに、実習を通して実験の進め方、研究発表の技術、科学的報告書の作成法について教授する。
	病理学概論	4	◎				病理学は疾病の原因とそれによる結果（表現系）の関連を説明する学問である。一つの結果が原因となって次の結果をもたらす場合もある。授業では、循環障害、腫瘍、感染、免疫系の異常、遺伝、代謝の異常など主要な病因と、それによって引き起こされる疾病の一般的な特徴について取り上げ、疾病の原因とその結果についての総合的な理解を目指す。

区分	科目名	履修開始セメスター	1	2	3	4	科目概要
			理学療法に関する最新の知識と技術を理解する能力を有している	理学療法に関する体験や実践を通して得た情報を整理し応用する能力を有している	理学療法に関する専門的知識と技術を習熟する能力を有している	理学療法士として必要な治療技術および企画力、円滑な対人交流を行う能力を有している	
学科基礎	感染管理学	2	◎				感染管理学では、在宅および病院・施設内において発生する様々な感染の問題を知り、その予防対策と対処方法について理解する。その上で、リハビリテーションを実施する際の具体的な注意点と他職種との連携の仕方を学習する。また感染経路の把握の仕方やサーベランスの重要性などマクロな視点も身につけられるように教授する。
	基礎運動学	2	◎				運動学は、人間の身体運動の機構を科学的に分析する学問であり、各関節の動きを力学的に解説する解剖学的運動学、呼吸、循環、代謝などの生理学に基づく運動学、筋、神経系の運動神経生理学に基づく運動学などの分野に分けることができるが、これら心身の運動の発現を構成する基本的な要因について教授する。特に、正常な運動の理解に重点をおく。
	基礎運動学演習	3	○	◎			基礎運動学における正常な運動についての理解に基づき、何らかの原因で生じた運動障害に視点をあてたものが臨床運動学である。従って、臨床運動学とは、身体運動学および運動生理学の運動障害学といえる。運動障害の治療にあたっては運動動作分析が不可欠であり、臨床運動学実習では運動器の解剖、生理、運動学の知識を基礎として、運動器の構造と機能の関係を考察、理解し、運動障害分析能力を養うことをも目標とする。
	基礎運動学実習	4	○	◎			基礎運動学において学習した関節機能、神経・筋機能に関して運動観察から各種測定機器による計測を通じて、分析手法を学習する。関節運動学、運動力学の知識を基に、運動機能について解析方法を教授する。
	内科学Ⅰ	3	◎				内科学の総論として疾病の概念、診断・治療学の基礎、加齢により生ずる変化を理解できるように講義する。リハビリテーション医療において、運動障害や機能障害、精神障害に直接的あるいは間接的に関与する疾患のなかで、特に循環器、呼吸器、消化器、血液疾患について、それぞれの病因や病態、診断、治療、予後について教授する。
	内科学Ⅱ	3	◎				内科学の総論として疾病の概念、診断・治療学の基礎、加齢により生ずる変化を理解できるように講義する。リハビリテーション医療において、運動障害や機能障害、精神障害に直接的あるいは間接的に関与する疾患のなかで、特に、脳・神経、内分泌・代謝、腎・泌尿器、感染症、免疫・アレルギー疾患について、それぞれの病因や病態、診断、治療、予後について教授する。
	精神医学	4	◎				精神医学では精神医学・精神医療の歴史を理解しながら、精神・身体症状や疾患、障害を神経生理・身体機能と関連づけて学習する。また代表的な精神疾患や精神障害についての知識を身につけるとともに、精神医学における治療の概念や治療の捉え方についての学習を深める。
	臨床心理学	4	◎				臨床心理学では領域・専門に関わらず療法の基礎となる人間理解について心理学の歴史・各種理論・各種技法から学習する。またその学習を踏まえて、悩むこと・行動・障害・病理・人間関係・回復などを人としての存在から捉える視点を身につける。 幼小児期から壮年・老年期までの生涯発達という捉え方を基礎にして、各発達期を相互に関連付ける時系列的な理解と生活を医療・福祉にとらわれず幅広く捉える空間的理解の相互作用の中で統合する視野を身につける。また各発達段階での課題達成の状況が障害を抱えた際にどのように影響してくるかを自己決定、自立をキーワードにして学習する。
	神経内科学Ⅰ	3	◎				神経内科学Ⅰでは、意識障害、運動麻痺や失調の病体、高次脳機能障害などの総論に加えて脳血管障害、末梢神経疾患、筋疾患、神経変性疾患などの病態について教授する。とりわけリハビリテーションと関連づけて神経学的徴候、病態、病理、各種検査所見、治療、予後などを解説し、リハビリテーションプログラム作成を考慮した講義とする。
神経内科学Ⅱ	3	◎				神経内科学Ⅱでは、神経内科学Ⅰで履修した神経内科学の総論を基礎とし、さらに認知症・脱髄疾患・腫瘍性疾患・感染症疾患・機能的疾患・全身疾患に伴う神経症候などの病態について教授する。神経内科学Ⅰと同様に、リハビリテーションと関連付けての疾患の解説を軸に、病態・症状に対応した訓練プログラムの立案・実践を目標とした講義を行う。	

区分	科目名	履修開始セメスター	1	2	3	4	科目概要
			理学療法に関する最新の知識と技術を理解する能力を有している	理学療法に関する体験や実践を通して得た情報を整理し応用する能力を有している	理学療法に関する専門的知識と技術を習熟する能力を有している	理学療法士として必要な治療技術および企画力、円滑な対人交流を行う能力を有している	
学科基礎	整形外科Ⅰ	3	◎				筋・骨格系、運動器系の診療に必要な発症病理、診断法について解説し、医学領域・診療科としての整形外科の基本的な考え方と代表的な治療法について概説する。具体的には診断・治療総論、外傷、関節疾患、炎症性疾患、骨軟部腫瘍などの概説に続いて、各解剖単位ごとの代表的疾患の診断治療を、機能解剖と関連づけながら述べる。整形外科Ⅰでは解剖単位として上肢と頸椎を取り上げる。
	整形外科Ⅱ	4	◎				「整形外科Ⅰ」に引き続き、筋・骨格系、運動器系の診療に必要な発症病理、診断法について解説し、医学領域・診療科としての整形外科の基本的な考え方と代表的な治療法について概説する。具体的には胸椎・腰椎疾患、下肢の疾患に続いて、高齢者に特有の疾患やスポーツ傷害、筋・骨格系の画像診断についても講義する。治療に関連の深い機能解剖、病態生理、疾患概念の理解に特に力を置く。
	脳神経外科学	3	◎				脳神経外科に必要な解剖、神経学、検査画像などを通じて、基本的な脳の構造、生理学的な働きを理解することで、多くの疾患や障害の起こり方の正確な知識を基にした対処法を考える力を養う。また、基本的手術法、診断技術について学び、腫瘍、血管障害、先天奇形、外傷、感染症、機能的異常などの各疾患についての手術を主とする治療法を理解し、術後（術前を含め）のリハビリテーションが円滑に行われるようにする。
	小児科学	4	◎				小児科学は、小児を対象とした内科学であり、出生直後の新生児から、一般には15歳までを対象としているが、その範囲は、救急、保健、心の問題、母子関係といったように極めて広いものである。ここでは、リハビリテーションを必要とする小児疾患の診断と治療を主に、小児リハビリテーションに必要な小児科学の知識と技術を教示することを目的とする。
	画像診断学	4	◎				画像診断は、近年の技術進歩によって医療現場において不可欠なものとなっている。特に、リハビリテーション分野の対象疾患である整形外科的疾患、及び脳血管障害等の治療において障害部位の確認は回復予後において関係がある。理学療法士・作業療法士にとってX線・MRI等の知識を学ぶことは大切であり、画像をとおしてリハビリテーションの対象疾患の所見について講義する。
	救急医学	4	◎				リハビリテーション医療において、緊急を要する疾患や不慮の事故に遭遇するのは避けられないものであり、理学療法士および作業療法士には救急医療への対応が求められている。医療人として冷静かつ適切に心肺蘇生を含む救命処置が実践できるように教授する。さらに、循環不全や呼吸不全、中枢神経障害、外傷、熱傷、精神科疾患などの重症救急疾患の病態と診断および治療、災害医学、脳死と臓器提供などについても理解できるように講義する。
	薬理学	5	◎				医師、看護師、薬剤師、管理栄養士など多職種チームでリハビリテーションに従事する職種につく者として、理学療法士、作業療法士には、対象者の理解と評価のため、薬理学の基本的な知識が必要である。本講義では、薬剤の作用機序、体内動態などについての基本的な概念を学ぶとともに、理学療法士、作業療法士にとって特に重要な呼吸器疾患、循環器疾患、代謝疾患、神経疾患、精神疾患などの治療薬についての実践的な知識を修得することを目標とする。
	栄養学	2	◎				栄養学とは、食品やその中の成分、栄養素がどのように人間の体の中で利用されたり影響されたりしているかを食品や食事の面から研究する学問であるが、近年、経口摂取を含めて栄養状態がリハビリテーションを行う上で重要視されている。それは、栄養が生命維持は言うに及ばず生活活動や健康の維持・増進に必要な物質を外界から取り入れてこれを利用する現象を指すからである。この栄養学を医療およびリハビリテーションに関連させて講義する。
	理学療法学概論	1	◎				日本における理学療法の歴史は古く、リハビリテーション医学の発達に伴ってその範囲を拡大してきた。そこには対象疾患、理学療法手技、職域、さらには法律や制度などといった要因が存在する。このような理学療法を取り巻く状況の概要を教授し、理学療法のあり方や問題点を提示することで、理学療法の全体像の把握や関心の向上に努める。

区分	科目名	履修開始semester	1	2	3	4	科目概要
			理学療法に関する最新の知識と技術を理解する能力を有している	理学療法に関する体験や実践を通して得た情報を整理し応用する能力を有している	理学療法に関する専門的知識と技術を習熟する能力を有している	理学療法士として必要な治療技術および企画力、円滑な対人交流を行う能力を有している	
学科基礎	理学療法研究法	5	◎				理学療法では、知識と技術の習得に加えて、理学療法過程における問題点解決能力が重要となる。したがって、理学療法研究法では、理学療法過程において生じる疑問点・問題点をどのようにして解決するかといった方法論を教授するが、研究者としての視点、論理的展開やデータ収集、さらにはそれらの解析方法と導き出された結果への考察、そして結論へと導いていく方法論に重点をおくこととする。
	理学療法研究法演習Ⅰ	6				◎	理学療法領域における研究方法を学び、自らの疑問や問題に対して命題を立案し、仮説を作成し、仮説を検証するための実験計画等を作成する。
	理学療法評価学Ⅰ	2	◎				理学療法を有効なものにするためには、症状・障害の正確な評価が重要である。また評価は、障害の判定、理学療法プログラムの決定、実施したプログラムの有効性の判定基準として必要である。この理学療法実施には不可欠となる「評価」の意味・意義について学ぶ。
	理学療法評価学Ⅱ	3	◎				理学療法を有効なものにするためには、症状・障害の正確な評価が重要である。また評価は、障害の判定、理学療法プログラムの決定、実施したプログラムの有効性の判定基準として必要である。理学療法評価学Ⅰで学んだ評価の意義・意味を理解した上で、実際の各種検査・測定の方法を学ぶ。
	理学療法評価学演習Ⅰ	4		◎			主に理学療法評価に必要な触診技術の修得を目指す。触診技術は、正確な評価が可能となるだけでなく、理学療法の実践においても重要である。ここでは解剖学、運動学等の知識を基盤にしながら体表から骨のランドマークや靭帯、筋といった理学療法士に必要な触診について教授する。
	理学療法評価学演習Ⅱ	4			◎		理学療法を有効なものにするためには、症状・障害の正確な評価が重要である。また評価は、障害の判定、理学療法プログラムの決定、実施したプログラムの有効性の判定基準として必要である。理学療法評価学Ⅰ・Ⅱで学んできた評価の意義・意味を踏まえて、代表的な疾患に対する必要な評価項目を学ぶ。
学科専攻	運動療法学	4	○	◎			理学療法は物理療法と運動療法を中核とするが、なかでも運動療法は最も重要な部分である。この運動療法は運動機能障害に対するものだけでなく、生活習慣病など疾病の予防や介護保険領域の介護予防、さらには健康増進といったヘルスプロモーションの領域にまで拡大しつつある。運動療法学はこのような運動療法の歴史、経過を踏まえ、運動療法の目的、対象、適応と禁忌などを概説する。また、疾病と運動療法の関係についても概説する。
	運動療法学実習	5		◎			理学療法の中核的な治療手段である運動療法の理論を理解するとともに、その基本的技術を修得する。まず、等尺性・等張性・等運動性収縮、求心性・遠心性収縮等の運動を実施し、運動療法の基本を学習する。ついで、関節可動域運動、筋力増強運動、[筋]持久力増大運動、協調性改善運動、全身調整運動、神経筋再教育、神経生理学的アプローチ、機器を用いた運動療法を学習する。
	運動器系理学療法学	5			◎		脱臼・骨折、骨・関節炎、脊椎症、腰痛、R A等の整形外科疾患を中心に、その疾患特性と理学療法評価、理学療法プログラム等について教授する。
	運動器系理学療法学演習	6		◎			運動器系疾患の理学療法の実際を、評価および理学療法を結び付けながら演習を行う。
	中枢神経系理学療法学	5			◎		中枢神経系は、身体各部の制御を行う重要な器官である。そのため、この部位の損傷は生体を持つ様々な機能に影響を及ぼす可能性がある。特に脳血管障害によって生じる障害は運動障害、感覚障害、高次脳機能障害など多岐にわたる。中枢神経系理学療法の学習のために、中枢神経系の構造と機能および脳血管障害による病態の理解も必須となるため、その症候と検査（評価）をあわせて学習する。さらに、これらの基礎知識に基づいた脳血管障害に対する理学療法アプローチの概要について学ぶ。
	中枢神経系理学療法学演習	6		◎			脳血管障害患者および脳血管障害に起因する障害を有する患者の評価および理学療法の実際を、視聴覚および触知、デモンストレーション等を用いて演習を行う。

区分	科目名	履修開始セメスター	1	2	3	4	科目概要
			理学療法に関する最新の知識と技術を理解する能力を有している	理学療法に関する体験や実践を通して得た情報を整理し応用する能力を有している	理学療法に関する専門的知識と技術を習熟する能力を有している	理学療法士として必要な治療技術および企画力、円滑な対人交流を行う能力を有している	
学科専攻	内部障害理学療法Ⅰ	5			◎		呼吸障害、心疾患、糖尿病などの内部障害に対する評価、プログラム作成、理学療法について教授する。呼吸障害では、急性呼吸不全および慢性呼吸不全について、心疾患では、心筋梗塞ならびに慢性心不全について、糖尿病では運動療法について教授する。
	内部障害理学療法Ⅱ	5			◎		リハビリテーション関係職種において、その業務上に喀痰等の吸引が必要となる場合（理学療法士が体位排痰法を実施する際、作業療法士が食事訓練を実施する際、言語聴覚士が嚥下訓練等を実施する際など）がある。そのため吸引行為の基礎知識と技術の習得が求められており、当該行為を安全且つ的確に実施できるよう、知識と技術を学ぶ。
	内部障害理学療法学演習	6		◎			内部障害理学療法Ⅰ・Ⅱで学んだ知識・技術を元に、各疾患における画像診断や臨床所見を理解するとともに、理学療法評価と理学療法の実践を演習する。
	神経筋障害理学療法学	5			◎		神経変性疾患、脊髄性疾患、末梢神経疾患、筋原性疾患の評価、プログラム作成、理学療法について、疾患特性と病期さらには生活支援を含めて教授する。
	神経筋障害理学療法学演習	6		◎			神経筋障害理学療法学での基礎知識を元に、代表的な神経筋疾患の個々の評価と理学療法等について演習する。また、リスク管理、運動療法技術、補装具や環境調整などの代償的手段の実際について演習する。
	装具学	5			◎		装具とは、四肢・体幹の機能障害の軽減を目的として使用する補助器具であり、その使用目的は、運動器疾患による変形の予防や矯正、麻痺等による機能の代償や補助である。本講義では装具に関する基本的知識を習熟させるとともに、装具の適応と理論および適合判定について講義する。
	義肢学	6			◎		義肢は、何らかの原因により失われた身体の一部を人工的に作製したものであり、切断のリハビリテーション領域では多用されるものである。この義肢によって失われた身体機能がすべて代用されることは極めて困難であるが、より良い義肢製作者と理学療法によっては機能的な状態を回復させることが可能である。したがって、義肢学は、切断者の身体状況に適した義肢のあり方を学ぶとともに、切断者がその義肢を有効に操作できるよう、残存機能を最大限に増進し、適切な断端を形成し、さらに適切な装着訓練を学ぶ。
	物理療法学	5			◎		物理療法は、疾病の治療もしくは症状の改善を目的に行われるものであるが、治療効果の面からすれば病態と物理療法機器の適応についての理解が必要である。また、物理療法の効果の検証の面からすれば、生理学に基づいた個々の物理療法手段の治療的根拠を理解しておく必要がある。このような観点に基づき、物理療法の効果、適応さらには禁忌について教授する。
	物理療法学演習	6		◎			物理療法は、疾病の治療もしくは症状の改善を目的に行われるものであるが、治療効果の面からすれば病態と物理療法機器の適応についての理解が必要である。また、物理療法の効果の検証の面からすれば、生理学に基づいた個々の物理療法手段の治療的根拠を理解しておく必要がある。このような観点に基づき、物理療法の効果、適応さらには禁忌について教授する。
	日常生活動作学	5			◎		理学療法の対象とする多様な障害を有する個人の生活活動・動作を把握・分析し、その人が将来生活していくために必要な活動・動作を予測することによって適切な治療目標や治療計画の策定に貢献しようとするものである。また、単なる評価だけでなく、それぞれの障害に即して生じる能力障害を改善するための活動・動作トレーニングの原則を概説する。
小児理学療法学	5		○	◎		脳性麻痺を中心に他の重症心身障害児の理学療法を教授する。この小児理学療法には成長・発達の要因が重要であり、これらを含めた適切な理学療法を選択する能力が必要となる。また、小児疾病、とりわけ運動機能障害が生活活動を制限し成長・発達の障害につながる可能性があることを教授する。	

区分	科目名	履修開始セメスター	1	2	3	4	科目概要
			理学療法に関する最新の知識と技術を理解する能力を有している	理学療法に関する体験や実践を通して得た情報を整理し応用する能力を有している	理学療法に関する専門的知識と技術を習熟する能力を有している	理学療法士として必要な治療技術および企画力、円滑な対人交流を行う能力を有している	
学科専攻	地域リハビリテーション論	2	◎				地域リハビリテーションとは、障害を有する人が地域社会のなかで共生と共同を以って積極的な社会参加を通して、生きがいを感じながら自らの人生を主体的に生きることを支援することである。このような地域リハビリテーションを実践するためには、保健・医療・福祉の動向を踏まえて、障害を有する人のQOLに視点を当てた活動は不可欠であり、障害者の生活を重視した包括的援助体系の確立が必要である。講義ではこれらを多面的に述べる。
	地域理学療法学	5			◎		医療機関だけにとどまらず、「地域」に根ざした理学療法の展開が益々重要性を増してきている。そのため、地域リハビリテーションのなかで理学療法と理学療法士が担うべき役割と機能について概説し、地域理学療法に関連した現代における基本的事項を学ぶ。さらに、地域理学療法の具体的実践を提示することで、今後、在宅や施設における地域理学療法を担っていくための基盤を築く。
	健康増進理学療法	6			◎		運動が健康に及ぼす影響を説明したうえで、疾病予防、介護予防のための理学療法の概要について具体的に教授する。高齢者の転倒予防のための評価とトレーニングの実際、生活習慣病としての高血圧、高尿酸血症、高脂血症などに対する予防的手段としての運動療法の意義と実際について教授する。
	福祉用具論	4		○	◎		在宅障害者や高齢者をより豊かにし、自立生活や介護負担軽減を図るために用いる福祉用具について、その種類と機能、特性を解説し、生活範囲の拡大を目指した福祉用具の適用原則と注意点を教授する。また、実技演習を通じてベッドサイド、車椅子、リフトなどの福祉用具の選択、使用法、さらに介護者への指導方法を習得させる。また、現在の医療・福祉制度における福祉用具に関連する制度についても学ばせる。
	臨床バイオメカニクス	6			◎		バイオメカニクスとは運動に関係する生体系の構造や機能を力学の法則に照らして研究する応用学である。その内、人間の身体運動に着目し障害者の日常生活動作や関節運動を取り上げ、障害の原因や運動の仕組みを明らかにして、人間の運動についての理解を深めることを目標とする。
	理学療法技術論Ⅰ	4	○			◎	理学療法を実施するにあたり基本的理学療法臨床能力の3領域について認知領域（知識や理解力等の頭脳の能力）はもとより、精神運動領域（診察・検査等の技能）および情意領域（態度・習慣などの人間性）の必要性を理解し、基本的理学療法臨床能力における技能とそれを実施する際の態度を確認する。
	理学療法技術論Ⅱ	6	○			◎	理学療法を実施するにあたり、総合的理学療法臨床能力・態度・倫理・安全管理の関連性を理解し、患者さまとの適切な応答の仕方（言葉、態度、行動など）、各検査測定、手技を正確に実施するための原則、方法、リスク管理、検証過程について修得する。
	臨床基礎実習	3	○			◎	入学目的の再確認と今後の学修意欲の向上に繋げるものであり、リハビリテーション提供を行っている医療、介護・福祉施設（病院、診療所、介護老人保健施設、通所リハビリテーション、訪問リハビリテーションなど）での実習を通して、理学療法士の業務を見学・体験するものである。また、理学療法（室）に必要な各種機器の機能、理学療法士と他の専門職との連携のあり方を学び、専門職としての意識の向上を図る。さらに、学内で修得した理学療法評価の一部を実践する事によって、技術向上を図るとともに次期の臨床評価実習の礎を築くことを目的として行う。
臨床評価実習	6			○	◎	臨床評価実習は、臨床実習指導者の指導のもと理学療法評価や治療、指導に基づく評価の実践を体験するものであり、基本的な評価手技の確認と技術の向上を目的とする。また、治療見学を通して理学療法士としての姿勢を学習する。	

区分	科目名	履修開始セメスター	1	2	3	4	科目概要
			理学療法に関する最新の知識と技術を理解する能力を有している	理学療法に関する体験や実践を通して得た情報を整理し応用する能力を有している	理学療法に関する専門的知識と技術を習熟する能力を有している	理学療法士として必要な治療技術および企画力、円滑な対人交流を行う能力を有している	
学科専攻	総合臨床実習Ⅰ	7			○	◎	総合臨床実習Ⅰは3回生までに配当された必須専門科目単位を修得後に実施される。それまでに学んだ知識と技術を応用し、臨床実習指導者の指導のもとに理学療法評価・治療を体験する。評価、統合解釈、問題を把握し、その問題に応じた理学療法プログラムを設定する。さらに、再評価を行うことによって治療効果を検討する。また、理学療法士が果たすべき社会的役割やチームワークの重要性を理解し、理学療法実施上の総合的能力を高める。
	総合臨床実習Ⅱ	7			○	◎	総合臨床実習Ⅱは、総合臨床実習Ⅰに加え、知識の蓄積と技術の向上により、理学療法過程（適切な評価、統合解釈、問題の把握、問題に応じた理学療法プログラムの設定と実践、再評価による治療効果の検討）を、より適切に実施できることを目的とする。また、「臨床基礎実習」「臨床評価実習」「総合臨床実習Ⅰ」、そしてこの総合臨床実習Ⅱを通して、種々の理学療法提供室の高い理学療法が提供出来る能力を向上させる。
	理学療法研究法演習Ⅱ	8				◎	理学療法研究法演習Ⅰを踏まえ、仮説検証のためにデータ収集を行い、解釈の後、結論を導き出す過程を学習する。 さらに、理学療法士として意思決定能力や問題解決能力を培う一助とし、臨床に生かすための基礎力を修得することを目標とする。
	臨床理学療法特論Ⅰ	6				◎	医療・介護保険制度の理解、職場管理や職業倫理についての能力を高める。また一般的なリスク管理、カルテ記載、各種報告書等の記載等における必要な知識の習得する。
	臨床理学療法特論Ⅱ	8				◎	現在臨床で用いられている代表的な運動療法手技を実技を中心に教授する。
関連	生化学	1	△		○		人間が健康に生きていくためには、全身的恒常性を保つことが大切である。恒常性を維持するため、常に外界との間で物質交換がおこなわれており、それが化学的・物理的法則に基づいて繰り返される様々な化学反応に依存したものであることを、生化学の分野から概説する。生体分子の構造と化学的性質、生体触媒である酵素の役割を中心とした生体エネルギー学と代謝、遺伝情報の伝達等について講義する。また、近年は遺伝子診断が広範に実施されている。医療従事者に必要とされる基礎的知識を概説し、あわせて遺伝子検査に関わる生命倫理についても解説する。
	高齢者ケア論	3	○				高齢者が毎日安心して暮らし、自分らしく過ごすことができるよう、また、QOL（生活の質、人生の質、生命の質）の向上が図れるよう、介護についての基礎知識・技術を理解する。ADLや生活環境等を把握しながら、介護はどうあるべきかを学ぶ。 1. 介護とは 2. 介護と家族 3. 介護政策の動向 4. 身辺介護 5. 心理的援助 6. 生活の自立とは 7. 住環境の整備 8. 関連職種とチームケア
	障害児者ケア論	3	○				障害児を育てるにあたっては、子どもの障害や発達についての正確な理解や適切なサポートが必要である。家族のかかえる困難や悩みについて深め、必要な社会支援システムを考える。 1. 障害児を育てるということ 2. 家族の悩みについて 3. きょうだいの悩みについて 4. 障害児の自立と家族 5. 支援のシステムについて 6. 専門機関のあり方について 7. 支援の専門性について

区分	科目名	履修開始semester	1	2	3	4	科目概要
			理学療法に関する最新の知識と技術を理解する能力を有している	理学療法に関する体験や実践を通して得た情報を整理し応用する能力を有している	理学療法に関する専門的知識と技術を習熟する能力を有している	理学療法士として必要な治療技術および企画力、円滑な対人交流を行う能力を有している	
関連	居住福祉論	3	○				<p>住居および住居を核とする地域環境、即ち「居住環境」は在宅福祉の根幹である。居住福祉を主体者として捉え、より良くしていく基礎を理解し、居住福祉が抱える課題の現在と未来について考察を深める。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 居住の質 <ul style="list-style-type: none"> <li>- 人住まい・生活行為と住まい・住空間の成り立ち-</li> </ul> </li> <li>2. 心地よい居住 <ul style="list-style-type: none"> <li>- 安全性・快適性・衛生性・利便性・持続可能性-</li> </ul> </li> <li>3. 生活障害と居住-乳幼児期・高齢期・障害を持つ時期-</li> <li>4. 居住福祉の広がり-多様に集まって住まう空間-</li> <li>5. 居住福祉の広がり-地域環境の現状とあり方-</li> </ol>
	精神保健福祉論	3	○				<p>本講義では、精神障害者への社会政策の一環としての社会福祉サービスの歴史と理念の理解を基盤に、必要な法制度、援助活動、関連政策について理解を深める。さらにその上につけて精神保健福祉士の仕事の理念、意義、役割について論じる。そのため以下の内容を含むものである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 障害者福祉の歴史と理念、意義</li> <li>2. 障害及び障害者の概念とその特性</li> <li>3. 障害者福祉の基本政策</li> <li>4. 現代社会と精神障害者</li> </ol>
	医学一般	3	◎				<p>「健康とは何か」の考察からスタートし、臨床医学・医療の諸相について外科系の総論を中心に概説する。病態生理の理解に主眼をおく。また、他の離床医学系科目でカバーされていないテーマも取り上げる</p> <p>1 健康とは、2 外科の歴史・がんの外科治療、3 肝移植とサルコペニア、4 外傷総論、5 創傷治癒・熱傷、6 麻酔、7 輸血、8 呼吸器外科・心臓外科総論、9 がん薬物療法総論、10 放射線治療総論、11 小児がん治療、12 血液疾患、13 糖尿病、14 内分泌疾患、15 老年医学</p>
	精神科リハビリテーション学	5	○				<p>精神科リハビリテーション学とは、単なる精神科治療の一分野ではない。精神に障害を持った人が、人としての尊厳をとりもどして生きていけるようになるのか、ということを経験的に考える分野である。この授業では、精神科リハビリテーションの概念・技術・制度等について修得することを目標とする。</p>
	神経リハビリテーション学	4	◎				<p>神経疾患における病態生理学・症候学を基礎とし、リハビリテーション「もとの習慣を取り戻す手段」という視点に立ち、神経疾患のリハビリテーションを再考することを目的とする。病態・症状に対応した訓練プログラムの立案・実践はもちろん、日常生活指導・環境コーディネート・補助具の選定・疾患/障害受容の指導・公的支援の活用法等、より実践的かつ即戦力となる方法論を講義する。</p>
	健康科学論	5	◎				<p>従来健康は病気の対立概念として静的にとらえられてきたが、現在では積極的な健康への取り組みを本質とする動的な概念としてとらえられるようになった。この意味で健康を理解するためには、生物学・医学的知識のみでは不十分であり、哲学、倫理学、社会学、心理学といった他の学問領域の知識と考え方を総合的に学ぶ必要がある。</p> <p>本講座は健康という観点から、これまで学んできた基礎医学、臨床医学、その他の学問領域の知識を再構築することを目的とする。</p>
	スポーツ理学療法学Ⅰ	5	○		◎		<p>スポーツ外傷・障害の発生原因・病態と競技特性との関連を理解し、医療機関、スポーツ現場で行われる理学療法について学ぶ。また、関節可動域制限や筋機能障害に対する考え方、スタビライゼーションについて「スポーツ理学療法の基礎」を理解する。</p>
	スポーツ理学療法学Ⅱ	8	○		◎		<p>スポーツ理学療法学Ⅰの内容をベースとし、部位別のスポーツ理学療法について理解する。また、テーピングや障害予防プログラムなどを学ぶ。</p>

区分	科目名	履修開始semester	1	2	3	4	科目概要
			理学療法に関する最新の知識と技術を理解する能力を有している	理学療法に関する体験や実践を通して得た情報を整理し応用する能力を有している	理学療法に関する専門的知識と技術を習熟する能力を有している	理学療法士として必要な治療技術および企画力、円滑な対人交流を行う能力を有している	
関連	地域ケア論	8			◎		日本は、急速な高齢化が進行しており、医療や介護の需要増加が予測されている状況にあって、高齢者の尊厳を保持しながら自立生活支援を推進し、住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを継続できるような地域ケアシステムの構築が求められている。厚生労働省は、2025年を目途に、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を目指しており、その概要とリハビリテーション医療のあり方を学ぶ。